

# 暗闇の摩天楼



## ■真昼の停電

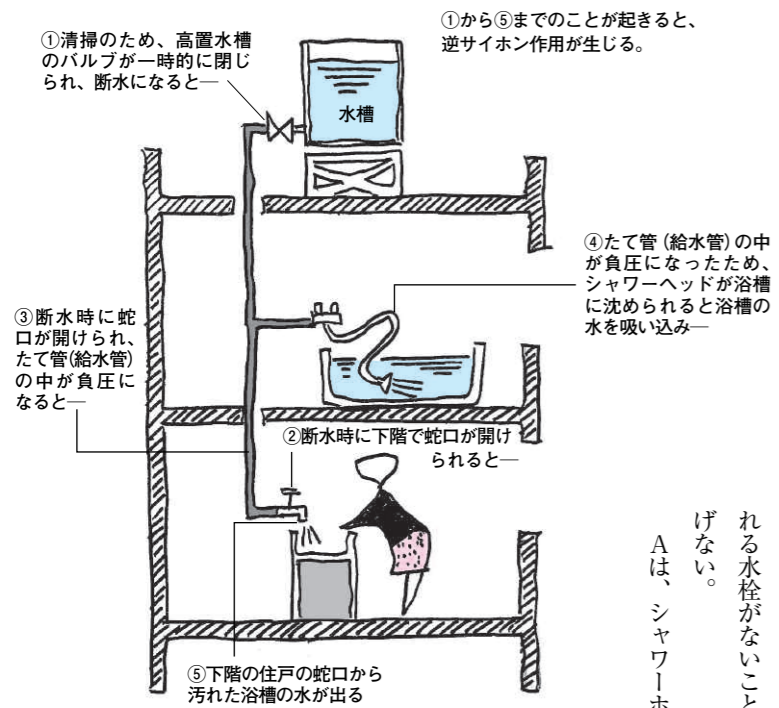
午前十一時五八分、突然、電気が消えた。十七階に住む主婦Aは、夫を送り出したあと、寝たきりの義父の食事と身のまわりの世話をやくと終え、洗濯を始めたところだ。いきなりドラム型の洗濯機が止まった。このマンションには、入居当初からドラム式の洗濯乾燥機がビルトインされている。スイ

「すぐ灯くから心配ないわよ」と、Aは義父に話しかけながら、一応器具を確認した。数時間はバッテリーでまず大丈夫だ。「停電になると断水するぞ」義父は、声にならない声で言った。Aは、それを聞きとるとキッチンに急いだ。たしかにマンションに住んでいちばん困るのは断水である。食事は外でもとれるが、トイレやお風呂はそうはいかない。最低限の飲み水はペットボトルで備蓄できるが、生活用水は困る。すぐにキッチンの水栓を開けてみた。水はまだ出る。いち早く水を溜めなくてはと、Aは妙な焦りに煽られた。

お風呂は全自動湯張り機能がついた給湯器。ボタン一つでお風呂に適温の湯を入れることができる。今は、お風呂の準備をするわけではない、水が欲しいだけだ。一瞬、どこにも浴槽に水を入れる水栓がないことに気づいた。しゃれた蛇口にはホースもつながらない。Aは、シャワーホースに目が止まり、ヘッドを浴槽に入れて水を

出せばいいことに気づいた。しばらくヘッドは左右に暴れたが、ある程度水が溜まると水没して静かになった。少しずつだが水位が上がってきた。本当は、シャワーヘッドを浴槽に沈めることは禁止されている。万が一、シャワーヘッドが水の中に入ったまま断水になると、給水管の中が負圧になることがあり、浴槽の水を吸い込み、その水がほかの住戸の蛇口にまわり、汚染された水が飲まれる可能性があるからだ。これは専門用語で逆サイホン作用といわれ、給水設備の常識としてつけてやってはならないことなのだ。

## 逆サイホン作用が発生するプロセス



事務所の監視盤では、非常用電源がいよいよ少なくなってきたことを示す警告ランプが点灯を始めていた。このままでは全館停電になるのは時間の問題だ。事務所の責任者は、何度か本社の技術担当に連絡をとりながら、次に給水用のポンプを止めることを決意した。トイレなどを使うために、今はまだ地下排水槽のポンプの電源はカットできない。「代替手段がないものは残すのが常識だ」責任者は直感的にそう判断した。全館放送でその旨を伝え、住民に浴槽に水を溜めることを勧めた。そのとたん地下階にある、水を汲み上げるための揚水ポンプがフル回転した。多くの住戸が一斉に水を使い始めたために高置水槽からの給水が追いつかない。住民から「水が出ない」という電話がひっきりなしに事務室に入ってきた。スタッフはその応対に追われている。停電は、ついに五時間を超えた。冬の日は短い。あたりはとうとう暮れている。

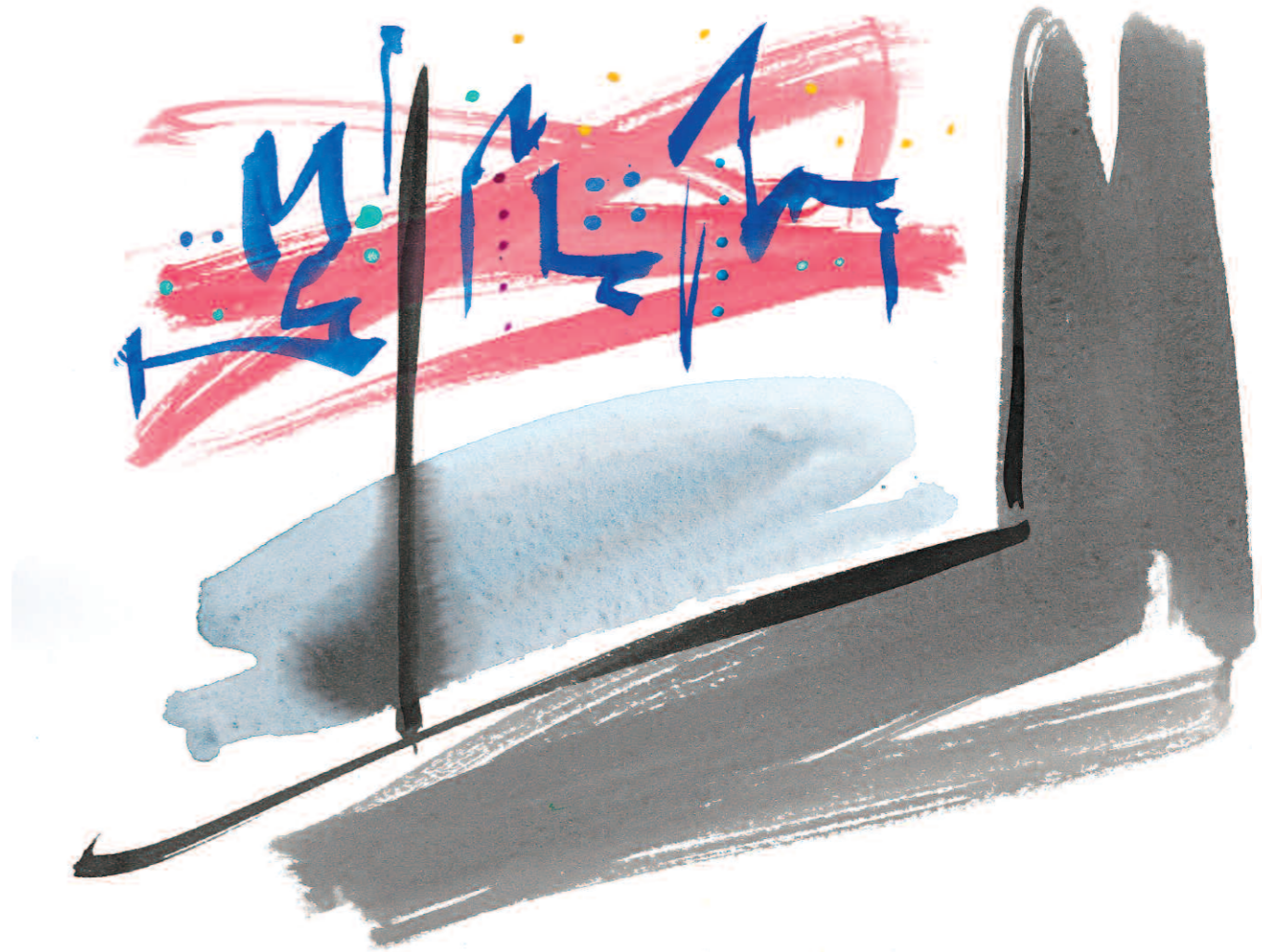
## ■非常用電源

停電の原因は、どうやら、変電所の配電系統で何らかの異常が発生したらしいとのことだった。自動ドア、機械式駐車装置の電源は、停電直後に自動的に落ちた。続いて非常用エレベーター以外のエレベーターが止められた。全館に非常放送でエレベーター使用の制限が放送され、管理会社の所員は一基ずつ一階に着床させ、搭乗者のいないことを確認して停止の札を下げていった。

午後一時。停電になって一時間が経過するといろいろ不都合が出てくる。非常用電源のバッテリーもそろそろ限界に近づく。このマンションは非常用発電機までは備えていない。非常用電源の優先順位はあらかじめ設定されている。非常用エレベーター、自動火災警報、非常放送、消火用ポンプ、非常用照明、避難誘導灯など、いずれも火災が発生したときに、避難ができる時間をめどに容量が定められている。

事務所の監視盤では、非常用電源がいよいよ少なくなってきたことを示す警告ランプが点灯を始めていた。このままでは全館停電になるのは時間の問題だ。事務所の責任者は、何度か本社の技術担当に連絡をとりながら、次に給水用のポンプを止めることを決意した。トイレなどを使うために、今はまだ地下排水槽のポンプの電源はカットできない。

「代替手段がないものは残すのが常識だ」責任者は直感的にそう判断した。全館放送でその旨を伝え、住民に浴槽に水を溜めることを勧めた。そのとたん地下階にある、水を汲み上げるための揚水ポンプがフル回転した。多くの住戸が一斉に水を使い始めたために高置水槽からの給水が追いつかない。住民から「水が出ない」という電話がひっきりなしに事務室に入ってきた。スタッフはその応対に追われている。停電は、ついに五時間を超えた。冬の日は短い。あたりはとうとう暮れている。



## ■ 予備のバッテリー

Aは、なかなか電気が灯かないことに焦りを感じていた。義父の人工呼吸器のバッテリーもあと一時間程度しかもたない。患者を移動させるための携帯用のバッテリー式小型呼吸器はあるが、それも一時間が限度だ。その時間内に病院に連れて行かなくてはならない。

Aは心細くなり、しきりに夫に携帯電話をかける。かけたからといってどうにかなるものではないと分かっていたが、夫の声がかきたいと思った。しかし電話は「電波の届かない……通信が込んでいる」と冷たく繰り返すだけだった。ようやく、電話がつながった。泣き出しそうに細かい声で喋るAに、夫はびつくりして、「どうしたんだ。しっかりしろよ。たかが停電じゃないか」

夫の会社の区域は停電に

はなっていない。この停電は、かなり限定された範囲のようだ。

「どういえば、親父を自宅で介護すると決めたときに、電力会社にALSの患者がいることを届けたような気がする。停電になると電力会社が優先的にこの情報をチェックして対応してくれることになっていたと思う。こちらから電力会社に連絡してみよう」夫はそう言って電話を切った。

Aは、夫の声を聞いて少し落ち着きを取り戻した。

日も暮れてきた。家の中は真つ暗になってきた。

『あなた、はやく帰ってきてよね』と心の中でつぶやく。介護の義父を抱えて、どうしたらいいのか、万が一のときには、救急車がすぐに来てくれるのかしら。エレベーターが動かなくなったらどんなふうに通ぶのかしら。呼吸器をつけて運ぶのだから、お義父さんも苦しいだろうな、と悪いことはかり考えてしまう。

「あの夫ひとつたら、私にこんなこと押し付けて……」と、苛立ちのあまり愚痴が口を突いて出てくる。

義父の部屋から、異常な警告音が聞こえてきたのはそのときだった。暗闇に響く聞いたことのないアラーム音。Aの胸は動悸で高まった。義父の部屋に入るのが一瞬怖かったが、勇気を出して駆け込む。真つ暗だ。Aは、枕元に置いてある懐中電灯を手にとり、義父の顔を照らす。そこには怯えた義父の目が光っていた。

「ごめんなさい、今明るくするから」Aは、懐中電灯を非常灯に切り変えて、棚の上に置いた。部屋全体が少し明るくなった。人工呼吸器のアラームの確認をし、リセットボタンを押した。あとバッテリー三十分の警告音だった。

「また停電なの、何か召し上がる」Aは、布団の乱れを直しながら義父の耳元にささやく。すでに五時をまわり、そろそろ夕食の支度にかかる時間だ。何をつくろうか考えたが、バッテリーのことで頭は一杯だ。

夫に再び携帯電話を入れようとしたとき、携帯電話のバッテリーが切れていることに気がついた。

また、装置に何か問題があったら私の携帯へ電話ください。ご主人さまには私のほうからも報告しておきます」

そう言って、救命スタッフは非常階段を降りて行った。

義父は、Aの手を握りしめ、何度もうなずいた。

\* \* \*

(2元)

## ■ 救命スタッフ

Aは、半狂乱になっていた。携帯用呼吸器のバッテリーも、懐中電灯の非常照明のバッテリーも終わりがかけていた。

「俺の命もこれまでか……」義父は、観念したのかじつと目を閉じたままだ。

Aは、隣の住戸に助けを求めればと考えたが、隣の人の顔も知らないのがそれを躊躇ちゅうちゅうさせる。

義父の呼吸が次第に苦しそうになってきた。ついにAは、隣の人に助けを求めようと立ち上がった。「携帯電話を借りて、救急車を呼ぼう」と。そのときだった。玄関の扉を激しくたたき音がした。夫が帰ってきてくれたのだと思い、急いで玄関を開けた。

「救命スタッフです。T電力からの連絡で非常用呼吸器を持ってきました。患者さんの具合はいかがですか。」

呼吸器メーカーの救命スタッフは、Aの様子を察し、義父の寝室に駆け込んだ。義父は一瞬驚いたような顔をしたが、ほっと安心して、生気を取り戻した。救命スタッフは、携帯用呼吸器を持参した人工呼吸器に手際よく交換し、ほかの呼吸器には予備バッテリーを装填まうたんした。

「これで大丈夫です。もう少し早く来られればよかったのですが、何しろ、この装置これで10キロ以上ありますから、ここまで上がってくるのに時間がかかって……」救命スタッフも間に合ってほっとした顔をしている。

「これ、携帯電話用の充電器です。使ってください。もし明日の昼ごろになっても電気が復旧しないようなら、もう一度来ます。

### 安孫子 義彦 (横ジエス)

ここに書いた話は、もちろんフィクションである。しかし起こり得ることなのである。危険は、そのメカニズムを知れば避けることができる。ブランド・ソーン（隠された棘）、一見、洗練された美しい住宅部品にも、トゲがあることを知ってもらいたい。

Yoshihiko ABIKO

1968年東京大学建築学科卒業。工学修士。住宅設備製品の企画・開発。コンサルタント業務に従事。一級建築士・建築設備士。共著に「住宅インテリアの設備」「建築再生の進め方」など。



# 盲目のセンサー

## ■ ガラスのギロチン

孫娘があとをつけてきたことに、老人は気がつかなかった。息子家族との週一回の夕食を終えて、自分の部屋がある離れに戻る途中だった。

老人は、連れ合いを亡くした一年前に、母屋を息子夫婦に譲り、地続きに離れ、今流に言えばアネックスを建てて一人で住んでいる。三十年住み慣れた土地で、当時は少し無理をしたが、大きめの土地を買ったのが幸いした。庭木もすっかり立派に育ち、定年後自分なりに気に入った庭に仕上げた。母屋から離れへのちょっとした空間の変化が、現実から浮世への自然な流れを演出している。定年後、毎日が日曜日。そのどうしようもない退屈の中で、自然と向き合う老人の小世界がそこにはあった。

閉まりかけた自動ガラス戸が、いきなり大きな音を立てた。老人は不思議な面持ちで振り返った。すると顔から血を流した孫娘が、泣くのも忘れて座り込んでいた。

「どうした。大丈夫か……？」

老人はその状況をすぐに理解できたが、言葉を探せず、近寄るなり抱き上げた孫娘は、わーっと火がついたような泣き声をあげた。それを聞いて嫁が飛び出してきた。

「おじいちゃん、どうしたんですか！」

嫁は、老人に抱きかかえられている娘の様子に気づき、走り寄るなり娘を老人から奪い取った。

「痛い？ 痛い？ 大丈夫よ、すぐなおしてあげるからね……」

嫁は娘の顔にあふれ出る血を指でぬぐい、老人をにらみつけ、責める口調で叫んだ。

出した。

救急車が到着し、救急隊員が応急処置をして近くの外科に連れていった。幸いにして、五針を縫うだけで、脳などへの異常はなかった。

その後しばらく、老人は落ち込んだ。食事に呼ばれても孫や嫁の顔をまともに見ることができない。孫娘が一人で老人の離れに行くことを、嫁が禁止したことも追い討ちとなり、ふさぎ込んだ。

老人は、自動ガラス戸の傍にたたずみ「何故、事故が起きたのだろう」と、あのとこの状況を、もう一度丹念に思い出しながら、一つひとつ確認するように目で追ってみた。老人は、あることに気がついて背筋が凍った。孫娘がもう少し早くガラス戸に到達していたら、首をはさまれ、もつと悲惨な事故になったかもしれない。まさにギロチンだ。五針程度で済んだのは、むしろ幸いだったことに気づいたのだ。

タッチセンサー式では、閉まりかけたガラス戸は、離れ側の面に設置されている光電式補助センサーの光のラインを遮断しない限り止まらないのだ。孫娘が閉まりかけたガラス戸を止めるには、タッチスイッチに手を伸ばして瞬間触れるか、ガラス戸を通り抜け光のラインを横切るしかないのだ。光のラインは床から八十七センチぐらいの位置にあり、前かがみで走りこんだ孫娘の頭上をかすめてしまう可能性もある。これは、どう考えても欠陥ではないか、老人はそう判断した。

## ■ 老人の訴え

老人は、事の顛末を、時間を追って丁寧に文章にまとめ必要な写真を整え、証拠として病院の診断報告書と費用明細を添え、事故のデータを作り上げた。念のために、知り合いの建築家にも意見を聞いた。建築家は、そんなことは初めて聞くといった感しで、頼りにはならなかったが、もし老人の言う通りなら、間違いなく製造上の欠陥だと言った。老人は、一年前に離れの工事を請け負

「おじいちゃん、ボヤボヤしないで、早く救急車を呼んでください」

老人は、どうしてよいかわからずポーツと立っていたが、嫁に急かされてようやく電話のある離れの居間に向かって走った。

将来、車椅子が必要になったときでも、老人が自力で自由に動き来できるようにと息子夫婦は、母屋と離れの渡り廊下の仕切りを透明な自動ガラス戸にしてくれたのだ。タッチスイッチに軽く触れるだけで開き、老人はいたく気に入っていた。

## ■ 事故は何故

自動ガラス戸は、住宅で使うには大きさもれない、という気持ちはあったが息子夫婦の気持ちに感謝して導入した。普通の自動ガラス戸には、レバー方式の接近センサーがつけられるが、人が近づくだけでしょっちゅう開閉するのは落ち着かない。そのためタッチセンサー方式を選定した。タッチスイッチに触れると、電波でモーターが動きガラス戸が開く。ある一定時間が経つと自動的に閉まるが、ガラス戸の下方につけられた光電式補助センサーが人の通過を検知したときには、閉まりかけたガラス戸は停止し、開くしかけになっている。

いつも老人は、孫娘の手を引いて一緒に離れにきて、するとはなく書道の手ほどきをするのを楽しみにしていた。嫁はそれを知ってか、娘が老人の部屋に行くのを黙認していたのだ。その日は、夕食の時間が遅くなったこともあり、嫁がキッチンの後片づけをしていたが、老人は声をかけ席を立った。テレビのアニメに夢中になっていた孫娘が、老人を追うようにして駆け出したことには誰も気づかなかった。

孫娘は老人の離れの入り口に向かって走っていった。ガラス戸が閉まりかけ、ドア直前にきたときガラス戸は孫娘の顔をこするようによぎった。ゴツンと大きな音がして孫娘はガラス戸に激突した。左の目の上をろくにガラスに打ち、額に裂傷が走り血が噴



トライブのネクタイを締めていた。

「これはご丁寧に。何かは存じませんがこれを受け取るわけにはいきません」老人は、封筒については受け取りをやりわり断った。工務店のオヤジも事情を察し、無理に押し付けることはしなかった。

「それで、どんな様子だったかお聞かせ願えますか」挨拶もろくにせず、若い社員はツツケンドンに話に割り込んだ。

「ここに、そのときの様子をまとめたものがあります。工事上の問題なのか、製造上の問題なのか、私には分かりませんが、私なりに感じた問題点を書いておきました。自動ガラス戸のセンサー機構が問題ではないかと思うのですが……」

「ちょっと見せてくれますか」メーカーの営業社員は、身を乗り出して老人が差し出した書類を受け取り、さっと目を通した。そして「現場をちょっと見てもいいですか」青年は、返事も聞かないうちに立ち上がった。老人に案内され、自動ガラス戸の現場の確認を行った。青年は、タッチしてからガラス戸が開くまで、光電式補助センサーの光を遮ったとき、閉まりかけたガラス戸が止まり、反転して戻るまでの時間を、時計を見ながら何度も試していた。

「この自動ドアやタッチスイッチには、異常なところは見受けられませんが……」ここまで聞くと、老人は営業社員の態度にたまらない不快感を覚えて、語調を強めて言った。

「じゃあ、孫娘が悪いとでも……」

「いやそういう意味で言ったわけではありません。誤解なさいないでください」工務店のオヤジはあわてて口を挟んだ。

「事情は分かりました。この書類をお預かりして、技術者と検討して、改めて説明に参ります」これ以上口論すると老人をますます怒らせることになりかねないと、話を打ち切った。営業社員はまだ何か言い足りないさうだったが、工務店のオヤジはそれを抑え、菓子折だけをそっと脇に残し、丁寧に挨拶をして席を辞した。

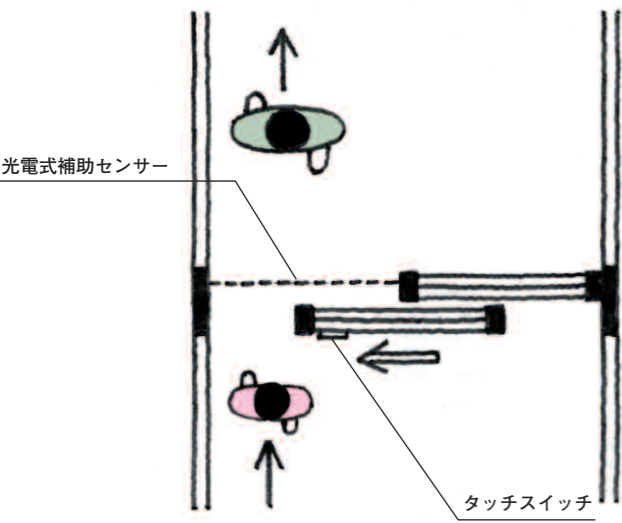
何回もくぐっている。くぐる度に、閉まりかけたドアはいったん止まり、反転して戻る。そこに人がいる限りガラス戸は、閉まりきることなく、開閉の作動を繰り返した。

工務店のオヤジたちが帰ったあと、老人は、久々に部屋で和紙を広げ筆をとっている。

「おじいちゃん。おシユウジ教えて……」と孫娘が入ってきた。

「ママが、おじいちゃんのところへ行っても良いって。これ一緒に食べよう」孫娘の手には、老人の好きな和菓子が載っていた。老人は、嬉しそうに孫娘を膝に抱き寄せ筆を持たせ、小さな手をとって紙の上に走らせた。

(完)



問題となった、  
光電式補助センサーだけによる  
タッチセンサー式自動ドア

タッチスイッチが設置されている自動ドアでは、1人目がタッチスイッチでドアを開けた後、2人目以降の後続の人が通過しようとするとうドアが閉まりかけて、ぶつかると可能性があることが指摘されていました。衝突事故が多発したことをきっかけにして、光電式補助センサーだけでなく、ドアが開いているときは人の有無を確認する状態感知センサーの新たな設置などにより、安全性がいっそう高まりました。

## 開かれた目

メーカーでは、技術関係役員が出席した安全対策の会議が開かれていた。

この日の会議で担当技術者は、工務店が持ち帰った老人のメモをもとに、老人宅で起きた幼児事故の顛末を分析し、画像とシミュレーターを使って説明した。ここではタッチセンサー式には盲点があることが指摘されたのだ。

改善策として、担当技術者は、ガラス戸の近くにいる人や物を感知できる状態感知センサーを組み合わせるべきことを提案した。閉まってくるガラス戸を止めたり、再度開けたりするために光電式補助センサーでは間に合わないため、敷居の前後に人が存在する限り扉が閉まらないようにするべきであることを主張した。その席で、担当技術者はセンサーの試作モデルを示し、その実験検証の報告書を提出した。その結果は技術役員を通して、すぐに経営陣に報告され、即日商品化されることが決定した。この経緯は、工務店のオヤジから老人にも報告された。

## 帰ってきた心

工務店のオヤジが、老人の家を訪問したのは、事故発生からすでに半年が過ぎていた。例の営業社員も一緒だ。老人に会うなり、「おかげさまで、安全なものができ、これに基づいた新しい安全対策の基準が業界でも決まりました。これも、あのときのあなた様のご指摘メモがヒントになっています。今日は、その製品第一号をお持ちしました。是非設置させてほしいのです」

「こいつも成長したもんだな……」目を光らせて喋る営業社員を見て、老人は思った。

「これでどうでしょう」同行した技術者は、新たに設置した状態感知センサーの機能を説明した。孫娘が面白がって、その下を

### 安孫子義彦

棚ジエス

ここに書いた話は、もちろんフィクションである。しかし起り得ることなのである。危険は、そのメカニズムを知れば避けることができる。ブラインド・ソール（隠された棘）、一見、洗練された美しい住宅部品にも、トゲがあることを知ってもらいたい。

Yoshihiko AHIKO

1968年東京大学建築学科卒業。工学修士。住宅設備部品の企画・開発、コンサルタント業務に従事。一級建築士・建築設備士。共著に「住宅インテリアの設備」建築再生の進め方」など。

# 記憶の不安

## ■暗示

僕が家を出たのは、今日もぎりぎりだった。バスの時間に余裕をもって出ようと努力しても、結果はいつも同じだ。バス停には、不思議なくらい、いつもの顔が揃う。マスクをかけて、細い目だけが覗く六十女。この女がいつも早い。続くのが大抵、三十代の若いカップルだ。このカップルと僕がいつも二番手を競う。今日は、このカップルがちよっと早かった。「えーっと、ガスコンロの火消したっけ」若い男は空を仰ぐぐさで、連れの女につぶやいた。「大丈夫、私、見・て・き・た。心配性なんだから……」

そんな言葉が耳に入ると決まって胸騒ぎがおき、僕は、不意に、小学生のときの、ある冬の日の光景を思い出す。

## ■トラウマ

日曜の昼過ぎ、留守番を頼まれた僕は、赤々と燃える石油ストーブの前で、寝そべって漫画本に読みふけていた。そばの安楽椅子では、猫が気持ちよさそうに丸くなっている。玄関から友達の呼ぶ声が聞こえた。僕は漫画本を椅子の上に投げ出し、玄関へ走った。そして、友達の誘いを断りきれず、遊びに出てしまった。猫が跳ね起き僕を追いかけ、その反動で漫画本が、ストーブの前に落ちたのも知らずに……。遊びに夢中になった僕は、消防車のサイレンの音で、家に走って帰った。僕の家からは、真っ黒い煙と炎が立ち上がっていた。消防車のクルクル回る赤い回転灯の下で『子供が中に……』と叫ぶ母の顔。近所の野次馬。必死に放水する消防士。僕の顔を見るなり、母は僕を抱き寄せ、そして突き放し、顔を平手で叩いた。「パン」という乾いた音。頬に感じたジーンとした痛み。夕暮れのしじまの中で、消えかけてくすぶっているわが家。呆然と立ち尽くす父と母。

僕の心には、この光景がトラウマになって深層心理に残った。この記憶は、ひょっとした言葉の暗示で、たびたび蘇る……。 「乗るんですか？」後ろから、中年の男の背立った声が飛んできた。いつの間にかバスが到着していた。はっと、僕は我に返ってきた。「どうぞ……」僕は家に帰るかどうか迷い、一台バスを見送ってしまった。出掛けに火の始末をしたか、どうしても思い出せなかったのだ。

## ■物忘れ

僕は、この四月に還暦をすぎ、会社の現役をリタイアした、い

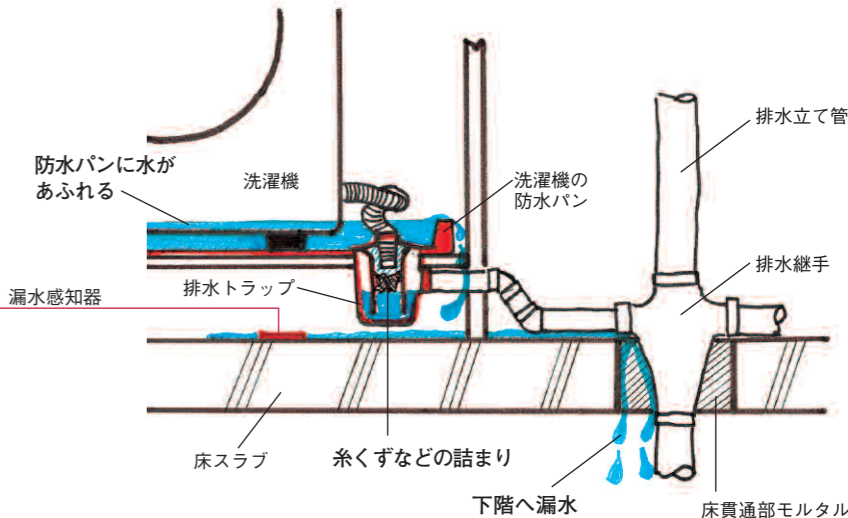
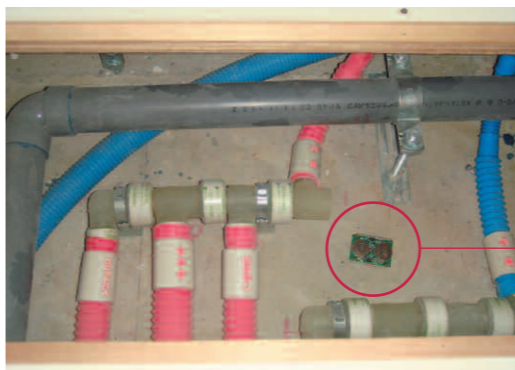
わゆる団塊の世代だ。会社にとっても、いつまでも残られては困る半面、急に辞められると、コレもまた困るのだろう。後進に僕の技術を何とか伝授してほしいと頼まれて、非常勤で勤めることになった。そのおかげで毎日が日曜日といった退屈な生活からは救われ、週何回かはかつての職場で気楽に働くことができていた。「出るとき火の始末と、戸締り頼むわね」いつも妻は、こう言って一足先に勤めに出る。

「わかった」と生返事しながら、僕は、ちよっとした不快感を覚える。トラウマをもった僕には、最後に、火の始末、戸締りをして家を出るのが、何より嫌なことなのだ。

ガスコンロ、部屋の照明、テレビ、エアコン、パソコン……消したかどうか、最近の住宅ではチェックするものが結構多い。そのうえ、僕は、このごろとみに物忘れが多くなってきた。忘れまいとすればするほど、自分の記憶力に自信がなくなる。どういふわけか、ずっと昔の記憶はよく覚えていた。一寸前の記憶が薄くなるから厄介だ。人間の脳の中で、新しい記憶は海馬に、古い記憶は大脳皮質にファイイルされるそうだ。この海馬の働きが弱くなると、ついさっきのことを忘れてしまう。でも、鮮烈な刺激や、繰り返される記憶は海馬にも蓄積されやすいという。僕は、ノイローゼになりそうなくらい、指で差し、声を出して確認動作を繰り返し、弱りかけた海馬を少しでも刺激する努力をしている。それでも家を出たあとになって、何度か戻ったことがある。

## ■洗濯の水が……

僕はいま、会社で仕事をしながら、不安な光景を、また思い浮かべている。何とか早く帰宅し、確認したい衝動に駆られている。今日は、午後からの出勤の日だった。こういう日は、妻が出勤したあと、掃除と洗濯するのが日課になっている。いつもは、洗濯物を浴室に干してから出勤するが、今日は、手間取り出勤時間になっても、洗濯の自動モードが終わらなかった。あと少しで



脱水モードに入るところでタイムリミット。仕方なく脱水後のヒーター乾燥モードを選んだ。そのことが気になって一日中落ち着かなかったのだ。休日は、洗濯機をかけたまま買い物に出掛けることがよくある。帰ってから干すのにちようどよいタイミングで脱水が終わっている。家を空けるのはせいせい1時間だ。

僕は、仕事が終わると、そそくさと帰路についた。『多分……、大丈夫……』と自分に言い聞かせながら、家の玄関の扉を開けた。どこからか、かすかな警報ブザーの音がする。僕は一瞬、ドキッとした。

『何の音……』今まで聞いたこともない音だ。洗面室の付近で鳴っている。

## 漏水警報器

「さては、洗濯機？」僕は、靴を脱ぎ捨て、洗濯機のところへ走り込んだ。洗濯機は、何事もなかったように停止している。洗濯物もドラムの中で、ほどよく乾いている。

『音は、どこから……』男は、あたりを見渡すが、どこで鳴っているのか分からない。

足元で、相変わらずピーッ、ピーッと鳴り続けている。僕は、ついに管理センターに電話をして状況を話した。

管理員がやってきて、警報を聞き、

「これは、漏水警報器の音ですね」と言っ、洗濯機の脇にある縦長のキャビネットの扉をあけて、排水ホースが差し込まれている排水口のあたりを、懐中電灯で照らした。(上図参照)

「防水パンから水があふれていますよ。床下も結構濡れていますね」

僕は、懐中電灯で照らされた先を覗き込んだ。狭い空間に洗濯機ホースがとぐるを巻き、排水口につき刺さっている。その周辺は泡だらけで、洗濯機の防水パンの淵まで溜まって光っていた。

「何、これ？」

管理員と僕は、下階の家に謝りに行った。

「天井からポタポタ滴しずが落ちてきたので、びっくりしました。何度もお宅に伺ったのですが、お留守のようで」

下階の奥さんは、いきなり無粋な男二人の訪問にとまどっていたがそう言っ、僕たちを中に入れてくれ、天井の濡れている様子を見せてくれた。水で変色した円形の染みができていて、その中心からポタポタ水が滴したっている。管理員は、天井の点検口から中を覗き、天井内に巧みにシートを敷き込み、漏水をバケツに誘導する養生をした。

「奥さん、2、3日たって、水が抜けて乾いてから、天井の補修をさせてもらいますので……」管理員は言いながら、それでいいかと言うように、振り返って僕に相づちを求めた。

「申し訳ありません。私のほうで全部、工事をさせていただきますので……」僕は、平謝りして、自宅に戻った。

## 記憶のリスト

その夜、僕は、帰ってきた妻に事情を話した。

「悪い予感が当たったよ。火事じゃなくてよかったけど……」と僕が話をすると、

「あなた、何で洗濯機をかけたまま、出勤したのよ」妻の怒りの一声。

「心配性の割には、どこか抜けてるんだから……」とどめの一発。

「排水口の清掃をしなかったのは、自分だけのせいではない」と、僕は思いながらも、強く言い返す気力はなかった。住宅総合保険に入っていたので、とにかく保険会社と交渉するしかないかと観念した。

僕の心配性は、このトラブルでまた膨らんだ。新たなトラウマが増えたのだ。

家を最後に出ることに、ますます自信を失った僕は、次の朝、

僕は、こんな光景を見るのは初めてだった。管理員は隣の洗面台の下のキャビネットの扉を開けて、詰め込まれたバケツや洗剤ボトルをどかし、点検口になっている底板のビスを外した。警報の音は急に大きくなった。コンクリートの床面に、なにやら豆粒のような装置(写真参照)が貼り付けてあった。

「これが、漏水感知器です」管理員は説明した。

「多分、入居のときに説明したと思いますが、水まわりの漏水に早く気づくために、電池式漏水感知器がつけられています」管理員は、鳴っている感知器の音を止めた。

「排水トラップが詰まって、あふれたんですね」排水口から洗濯機ホースを抜きながら、管理員は言った。

## 階下漏水

「ほら、糸くずがこんなに溜まっています。ほとんど掃除をしていませぬね。失礼ですが……」

「気がつかなかった、というよりは、こんな狭いところ正直、手が入りませんよ。これで、掃除せよ言うんですか」

「もちろんですよ」管理員は、しゃあしゃあと言っのけた。

床にこぼれた排水は、下階の住戸に浸透していた。通常は、マンションの床スラブは20〜30cmある。とくに最近のコンクリートは水密性が高いため、下階まで水が浸透するまでには相当の時間がかかる。漏水が生じ床下がプール状になり、長い時間気づかずにいると下階の天井に染み出る。そのため、気づいたときには、被害が相当拡大していることが多い。

僕のマンションの場合は、洗濯機置き場の脇に、上階からの排水用の配管が立っている。その配管の床貫通部分のすき間は防火のためにモルタルが詰められている。不幸にして、そのモルタルにひび割れがあり、配管を伝わり下階の天井に漏水したのだ。

「洗濯機をあふれさせまして……」

妻と一緒に出ることにした。

「お前と一緒に出るよ……」

「こんなに早く出て、会社で何しているの」妻は、怪訝そうに問いを返した。

「いや、会社の始業時間が早くなってね」

僕は、出勤時間まで会社の近くの喫茶店で時間をつぶすしかないと思っていたが、どこか、突っ張った。

喫茶店でコーヒーを飲みながら、いつとなく、お出かけチェックリストをつくり始めていた。だけど、僕は思った。『このリストのチェックを忘れたらどうしよう……』と。(完)

\* \* \*

高齢者ではなくても、物忘れを気にする人は多いと思います。家を出るとき戸締りや火の始末などのチェック項目を、玄関に張り出しているご家庭も多いことでしょう。最近の家電製品は、タイマーによる自動停止、過熱防止機能、転倒時消火機能など、留守でも大事に至らないよう、安全装置が組み込まれているものが多くなっています。

そのため、夜間や不在時にも機器を使うことができる便利さがあります。次第に注意力が緩慢になることが心配です。とくに排水のつまりを感じて給水を止めるといった装置は住宅にはまだありません。残念ですが、機械を100%信頼するには、もう少し時が必要でしょう。

### 安孫子義彦

(機)ジエス

ここに書いた話は、もちろんフィクションである。しかし起こり得ることなのである。危険は、そのメカニズムを知られば避けることができる。フラインド・ゾーン(隠された罠)、一見、洗練された美しい住宅部品にも、トゲがあることを知ってもらいたい。

Yoshihiko ABIKO  
1968年東京大学建築学科卒業。工学修士。住宅設備部品の企画・開発、コンサルタント業務に従事。一級建築士・建築設備士。共著に「住宅インテリアの設備」「建築再生の進め方」など。